

「大丈夫です。シャワーだけ貸してください。浴びたら帰ります」

覚悟は確かにできていたらしい。悲しいとは思わなかったし、涙も出なかった。

ゆっくりと歩いて浴室に向かい、淡々とシャワーを浴びて制服を身につける。まだ電車はいくらでもある時間だから、多少身体が辛くてもタクシーを使うのはやめよう、と考えるだけの余裕もあった。

「さようなら」

唇を笑みの形に曲げて、最後に告げる。臨也の表情は見なかった。きつといつも通りの、余裕のある笑みでも浮かべているのだろう。彼にとっては、ただの遊戯。恋人ごっこは、もう終わり。それだけのことだった。

振り返ることもせず、帝人は玄関を後にする。未練は残さない。今日で最後と覚悟を決めてきたのだから。

一步、もう一步。大丈夫。歩き出せる。浴室を出てから、臨也は何一つ自分に向かって言葉を紡がなかったと気づくのは、それから少し後になってからだ。